順心女子学園　中学校・高等学校

帰国生には最高の環境と条件

校長補佐　小山 和智

順心女子学園では、今春「特進コース」を開設するほか、海外 AO 入試を随時実施しています。
このシリーズでは毎回、“隠れた人気校”の素顔をご紹介しましょう。

● 帰国生等の精神面のサポート体制

順心で学ぶ帰国生たちの学力が、ぐんぐん伸びていくことは、学習塾・予備校の関係者には驚異の目で見られています。「どんな魔法を使うのですか？」などと、よく質問されるのですが、最大の要素は「生徒が“居場所”を見つけ易い」ということでしょうか？

日頃から、生徒が“居場所”を見つけ易い雰囲気作りに努めていることは、学力向上の基礎条件です。クラス担任や学年担当の教師だけでなく、スクールカウンセラーから事務・用務スタッフ、守衛に至るまで、生徒一人ひとりを見守る体制が整ってこそ、生徒は安心して学校生活を送れます。

授業中、帰国直後の生徒が思わず外国語で発言しても、教師も生徒もうろたえたり馬鹿にしたりはしません。「もう一度、ゆっくり日本語で話してごらん」という余裕が、クラス全体にあるのです。もちろん、周囲の生徒も、その空気を支えているわけです。

図書室に常駐している２人の司書も、大きな存在です。心の悩みを持つ生徒は「保健室に逃げ込む」とよくいわれますが、順心の生徒は図書室に行って、司書と話し込んで、最後は 元気の出る本を借りて帰るというパターンが普通です。

また、帰国生の保護者は、何か気になることがあれば直ぐに私にＥメールをくださいます。いわば「帰国生の母親ホットライン」ですね。自分の子だけでなく、同じクラスの生徒や上級生のことでも、その日のうちに教えてくだされば、校長以下全員で対処が可能です。たとえ教師に不用意な発言があった場合も、すぐに助言や指導ができます。

朝の読書の時間

● 高い英語力をより伸ばすシステム

英語は習熟度別で指導していますが、英語圏の現地校やインター校で学んだ生徒の多くは、さらに飛び抜けていますから、取り出して特別に指導をすることになります。もちろん、ネイティブやバイリンガルの教師の指導です。

図書室に２人の司書が常駐していることにより、生徒１人が１年間に平均 50 ～ 70 冊の本を読むことを可能にしています（この点は、大学側からも賞賛されています）。また、日本では 12 ～ 15 歳の子ども対象の原書の入手が困難なのですが、帰国生や保護者の協力も得て、良書の補充に努めています。

しかし、むしろ英語での知識がしっかりしている間に、日本語の学習用語 (CALP) を獲得させることのほうが急務です。いわゆる「ＪＳＬ」は、外国語の時間の一部と位置づけ指導することで、日英両語の“変換・編纂 (compile)”の能力を鍛えるわけです。

毎週６～７時間の英語の授業時間がありますが、そのうちの半分近くを「ＪＳＬ」に使っている生徒もいます。具体的な内容・手順は、別の機会に紹介しますが、ここで指摘しておきたいのは、帰国生への日本語指導を国語教師に任せている学校が多いことです。それでは、せっかく海外で身に付けた英語の力が伸ばせなくなってしまいます。やはり外国語習得法の素養のある教師が「ＪＳＬ」を指導してこそ、英語の保持伸張の効果も生み出せるのです。